

服装規範の許容範囲測定を試み(第2報)

○杉田洋子* 福井典代** 藤原康晴**

(* 國學院大栃木短大, ** 鳴門教育大)

目的 服装に関する社会規範—服装規範—は、人々の意識の中に漠然とした形で存在している。ある服装が、服装規範に同調しているか、逸脱しているかの判断にはあいまいさが含まれている。このあいまいさの判断をファジィ評定法(尺度にカテゴリーを設けず、幅を持たせた回答法)を用いて測定し、ファジィ評定によって得られるあいまいさの程度が、軽微な規範では大きく、重大な規範では小さくなるかどうかを、前報では評定者自身の評価—私的見解—結果を報告した。本報告では、「一般に世間の人々は、その服装をどの程度ふさわしいと考えているとあなたは思いますか」という設問で測定した主観的な世間の評価の結果を報告する。

方法 測定方法は場面、服装とも前報と共通である。場面はフォーマルの「結婚の披露宴」から、カジュアルの「コンビニへの買い物」までの4場面を選定し、服装はサー斯顿法に準拠して選定したドレスィからカジュアルまでの4種の服装を提示試料とした。この4種の各服装を上記の4種の各場面で着用したときの「ふさわしさ」の程度をファジィ評定法(尺度上にもっともよく当てはまる点(「SD評定値」)とその許容範囲を横長の円によって示す)を用いて測定を行った。

結果 各場面における各服装に対するふさわしさの許容範囲を示す評定幅を「世間の評価」について測定した結果、場面では、「大学の授業」、「親戚を訪問」、服装では、「カジュアル」と「フォーマル」が中程度の場合に評定幅が大きくなることがわかった。また、「世間の評価」におけるSD評定値は先に報告した「私的見解」の場合よりもやや「ふさわしくない」側にあることがわかった。